

令和7年度 第5回
丸山薰「帆・ランプ・鷗」賞 作品集



はじめに

丸山薫「帆・ランプ・鷗」賞は、子どもたちが詩を身近に感じ、詩を書くきっかけとなつてほしいとの願いから「はじまり」という意を込め、本市ゆかりの詩人・丸山薫の第一詩集「帆・ランプ・鷗」より命名いたしました。

第五回を迎えた本年度も、全国各地の小中高生の皆さんから、実に多彩な作品が寄せられました。どの詩にも、作者一人ひとりの視点と息づかいが感じられ、読むたびに新しい発見と感動がありました。若い感性が自由に羽ばたく姿を目の当たりにし、この賞を創設した意義を改めて深く感じています。

この度、厳正な審査を経て選ばれた入賞作品を一冊にまとめました。受賞された皆さんに心からお祝い申上げます。また、この作品集を手に取られた皆さんには、子どもたちが紡いだことばに込められた思いや、みずみずしい感性の輝きを感じ取つていただければ幸いです。

この賞が、丸山薫の業績とともに多くの方に詩の魅力を伝える架け橋となり、子どもたちの豊かな感性を育む契機となることを願っています。そして、詩が日常の中で、より身近な文化として息づいていくことを心より期待しております。

最後に、審査に携わつてくださつた選考委員の先生方、賞の運営にご協力くださつた丸山薫賞運営委員会の皆さんに深く感謝を申し上げるとともに、応募してくださつた全ての皆さまの今後のご活躍をお祈り申し上げ、発刊の挨拶といたします。

令和八年二月七日

豊橋市長　長　坂　尚　登

目 次

はじめに

【小学生の部】

入選作品……
入選作品選評……
選者作品……

選者 中本 道代

【中学生の部】

入選作品……
入選作品選評……
選者作品……

選者 八木 幹夫

【高校生の部】

入選作品……
入選作品選評……
選者作品……

選者 細見 和之

72 69 50

44 41 30

26 22 6

丸山薫の略歴と業績

【小学生の部】

選者

中本

道代

「帆・ランプ・鷗」賞

ふしぎなこと

優秀賞

たいひ

豊橋市立豊南小学校
四年 甲斐田 大知

豊橋市立つつじが丘小学校
二年 かわい ひなた

かわいいおとうと

豊橋市立牛川小学校
五年 中村 玲音

ゾウのやさしい耳

豊橋市立栄小学校
六年 岩澤 咲月

いのち

豊橋市立栄小学校
五年 岩田 優花

ちょうちん

豊橋市立牛川小学校
五年 田中 柚名

給食タイム

豊橋市立豊南小学校
五年 田中 柚名

佳作

いろんなあなたをのぞいたら

豊橋市立岩田小学校
二年 三田村 はぐみ



ようかいとあそぼう

豊橋市立岩田小学校

二年 ため田 そうすけ

心ぞうの音

豊橋市立松山小学校

二年 よしがい いな

豊川

豊橋市立牛川小学校

四年 林 奏剛

喧嘩

豊橋市立岩西小学校

六年 貝原 千誉

カブトムシ

豊橋市立野依小学校

二年 ひらまつ こう太

ぼくの家のカメ

豊橋市立野依小学校

二年 すぎもと ありと

犬

豊橋市立野依小学校

三年 たかせ りく

桜

豊橋市立野依小学校

六年 志賀 優龍



「帆・ランプ・鷗」賞

ふしぎなこと

どうして空は青いのだろう。

海の水は青いのに、コップに入れると、とうめいになるのだろう。

これもふしぎ。

夜になると、月ができる、でも月の形は、毎日ちがう、かけたり、まるくなつたり、まるでかくれんぼしてゐみたい。

これもふしぎ。

セミの声は、どこから聞こえるのだろう、木の上にいるはずなのに、あちこちから声がひびいてくる、まるで、空がうたつてゐるみたいだ。

これもふしぎ。

ぼくのかげは、いつもついてくる、朝はながくて、昼はちいさい、夕方になると、またながくなる、かげは、ぼくの友だちなかそれとも、太陽のいたずらなか。これもふしぎ。

豊橋市立牛川小学校
五年 甲斐田 楓馬

夢をみているとき、時間はすぐにつぎてしまう、朝になつて目をさめたら、もう夜のことは、ほんやりしか思い出せないのだろう、夢の中のぼくは、本当のぼくなのか。

これもふしぎ。

見上げると、空には無数の星そのひとつひとつに、だれかがすんでいるのだろうか、地球のよう、海や山があるのだろうか、会つたことのないだれかがぼくを見ているのかな。

これもふしぎ。

ふしぎなことは、いつもそこにある、見なれた毎日の中にあたりまえのかおをしてひつそりと、かくれてる。

ふしぎがあるから、ぼくは考える、ふしぎがあるから、ぼくはわくわくする。

この世界は、ふしぎがいっぱい、だから、とつてもおもしろい。

優秀賞

たいひ

夏休み お父さんの仕事へ
目の前に うんこの海
うんこの川
お父さんは 「うんこではない」と言つた
ぼくは 「うんこにしかみえない」と言つた
お父さんは 「これは 価値のあるたいひだ」と
言つた
たいひは 畑の栄養
たいたひは 田んぼの栄養
畑や田んぼで できたものを牛が食べて
うんこ うんこに木クズをまぜませ
土にやさしい最高のひ料に変身
ほくの家のまわり キヤベツ畑
いいキヤベツがたくさんとれる
お父さんの言う 「価値のあるたいひ」は
そういうこと
夏休み前
何もない畑に
たいひ山

ここにも たいひ山
あそこにも たいひ山
ダンプで運んだ うんこ山
あつちもこつちも たいひ山
たいひ山をくずし たいひ山
トラクターでたがやす たいひ山
夏休みが終わるころ
キヤベツのなえがならんだ
キヤベツ畑のできあがり
たいひの栄養ぐんぐんすつて
りつばなキヤベツ
たくさんのたいひ 運んだ
まだまだいっぱいある
牛は 每日 工サを食べる
たいひの原料
うんこ 每日する
うんこ 每日で
くるくるまわる
うことたいひ

豊橋市立豊南小学校
四年 青木 大知

かわいいおとうと

豊橋市立つつじが丘小学校
二年 かわいひなた

かわいい子

エーンというなきかた

ブーつというおこりかた

ブニブニほつペ

かあちゃんに

おこらでいる時

おとうとはないでいる

ぼくはさいしょなにもいわない

あとで

「かあちゃんおこりつぼくなつてるよ。」

とたすける

つぎに

ぼくがかあちゃんにおこらでいる時

おとうとが

「だいじょうぶだよ。」

「ぎゅうする。」

とぎゅしてくれる。

かあちゃんにも

「ないでるよ。」

「ぎゅしてあげて。
とたすけてくれる。」

ぼくもかあちゃんもごきげん

ああよかつた。

おとうともにこにこ

すごいな

ぼくのおとうと

ゾウのやさしい耳

豊橋市立牛川小学校
五年 中村 玲音

大きなからだで のっしのっし
ゆつくり歩く ゾウのあし
ちいさな石も ふまないよう
そつと 道をえらんてる

ながい鼻は

まほ

うの手

りんご

を

つかん

で

パク

り

と

たべ

た

お水を

ふん

すい

み

たい

に

ふ

いて

た

みんなが

「わあ！」

つ

て

笑

つ

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

た

て

いのち

豊橋市立栄小学校
六年 岩澤 咲月

「いのちがうばわれました」
「新しいいのちが誕生しました」

今朝のニュース
いのちつてどこにあるのかな

あ！ひらめいた！
頭の中にあるのかな

楽しいな、不安だな。どきどきする
胸にあるのかな

風がほほにあたつて気持ちがいい
体の表面にあるのかな

ひいおじいちゃんは十年前に死んだ
からだもなくなつた
だけど、ひいじいちゃんが私を膝にいれて
笑つてくれたこと覚えてる

いのちがどこにあるのかはわからない
だけど、ひいじいちゃんの「いのち」は私の中
にもあるみたい

ちようちん

豊橋市立栄小学校
五年 岩田 優花

ほんちようちんに火をつけて

私と姉で

ご先ぞ様こちらです

おがらのけむりに乗つて

きゅうりの馬

なすの牛

おたなまでご案内係が私の役目

和ろうそくの炎がゆらゆらと

ご先ぞ様が喜んでくれているみたい

お線香のけむりもふ段より高く上つたような

お部屋ではほんちようちんの電球をつける

ほんちようちん

明るくおたなを照らし

おぼう様のお経

和ろうそくの炎がゆらゆらと

やはり近くにご先ぞ様がいらっしゃるような

送り火のちようちん係

むかえ火よりも私の心はさびしくなる

きゅうりの馬

なすの牛

お土産は小さな半紙を折りたたみ

お米とお茶の葉を入れ

糸を通し背にどうぞ

いつも家族を見守つてください

ありがとうございます

そつとちようちんの火を消すわたし

佳作

給食タイム

豊橋市立豊南小学校

五年 田中 柚名

今日の給食、何が出る？

わくわくドキドキ、おなかグー。
カレーかな？ハンバーグかな？

まさかの「苦手なアイツ」だつたらどうしよう！
配ぜんの時間、しづかにね。

でも心の中は、お祭りさわぎ！

当番さんの手つき、かがやいてる。
早く来い来い、私のお皿！

「いただきます！」で給食タイムスタート。

みんながモリモリ、音を立てる。

あちこちで聞こえる、もぐもぐ音

ブロッコリーが、じつとこつちを見てる。

「食べてよ？」って言つてるみたい？

牛にゅうパックは四角い相ぼう。

いつも一緒の四角い相ぼう。

ゴクゴク飲めばほねまで元気！

デザートは、食後のサプライズ！
甘い笑顔がみんなに広がる。
給食つて栄養まん点。

明日も楽しみ給食タイム。

いろんなあなたをのぞいたら

豊橋市立岩田小学校
二年 三田村 はぐみ

ちくわのあなたを のぞいたら
さかなが およいでいたよ

ドーナツのあなたを のぞいたら
よだれが でちやいそうになつちやつたよ
ほうえんきょうのあなたを のぞいたら

いろんなところが 見えたよ

うえきばちのあなたを のぞいたら

きれいな 花が見えたよ

れんこんのあなたを のぞいたら

たべたくなつて しまつたよ

ジヨーロのあなたを のぞいたら

水がでちやいそだつたよ

ようかいとあそぼう

豊橋市立岩田小学校
二年 ため田 そうすけ

ぼくは、こんなことを考えた。
ようかいとあそんだら、どんなことができる
のかな？

ざしきわらしには、しようわのあそびを
おしえてもらおう。おれいにしおせんべいを
あげる。

ろくろくびとあそんだら、ながくいくびで
なわとびができるそうだ。ちょっとかわいそう
だけど。

七人みさきとあそんだら、八人で「だるまさん
がころんだ」がもりあがる。
ぬりかべとあそんでいたら、こわい人が来ても
パンチをふせいでくれる。

かさおばけとあそんだら、かさ回しができそう
だ。でもかさおばけの目が回ってしまうかも
しれない。

ぼくは、こんなことを考えた。

カツパとあそんだら、とくいなすもうで
しようぶしたい。あいつはなかなかつよいらしい。

いつたんもめんとあそんだら、せなかにのつて
空をとべそうだ。

心ぞうの音

豊橋市立松山小学校
二年 よしがい いな

ドク ドク ドク

ふだんの生活

ドックン ドックン ドックン

いもうとのおもちゃをこわしちやつたとき

ドクドクドクドクドクドクドクドクドク

おとうさんとマラソン大会のれんしゅうを
したとき

ドキドキドキ

ともだちとゆうぐであそんだとき。

ドクンドクンドクン

スケボーでころんだとき

ドキッドキッドキッ

こく立かがくはくぶつかんでトリケラトプスの

ほねをみたとき

きもちでかわる心ぞうの音

いきている。

のびる のびる どこまでものびる

みえなくなるところまでのびる

終わりがあるのかと うたがうぐらいまで
のびる

のびる のびる どこまでものびる

きれいな青色の川 川のそこがすきとおつて

みえる まるで太平洋の海かとうたがうぐらい
のびる

のびる のびる どこまでものびる

まるでウミガメが泳いでいるのかとうたがう

ぐらい自然ゆたかで生き物もいっぱいいる

みんなみんな元気にあそんでいる
どこまでものびる

のびる のびる どこまでものびる

まるで何万人も泳いでいるのかというほど

のびる のびる どこまでものびる

豊川は ぼくのゆめみみたいに

ずっと ずっと のびていく

頭の中にそぞうができる

のびる のびる どこまでものびる
キリンの首のようどこまでものびる
ヅウのハナのようにどこまでものびる

のびる のびる どこまでものびる
地球を1しゅうしてるのでとうたがうぐらい
どこまでものびる

のびる のびる どこまでものびる
うちゅうまでつながっているのかとうたがう
ぐらいのびる

のびる のびる どこまでものびる
豊川は ぼくのゆめみみたいに

喧嘩

豊橋市立岩西小学校
六年 貝原 千譽

いつももうさいお兄ちゃん
年上だからって王様気分
これとつて

あれちようだい
こんな生活もう
嫌だ

でも
いつかは仲良く
してみたい

喧嘩してばかり
もう喧嘩にはあきた
お兄ちゃんに言いたいこと
たくさんある

理想のお兄ちゃん
いるのかな
優しい
かつこいい

早く大人になつて
少しは優しくなつて
もう我慢の限界

もつと早く産まれたかつた
いうときかされるぐらいなら
そんなお兄ちゃんいるのかな

でもお兄ちゃんだから
仲良くしないといけない
そんなのできないけど
頑張ろう

いつかは必ず
やり返す

これからもよろしく

カブトムシ

豊橋市立野依小学校

二年 ひらまつ こう太

なつ休みにカブトムシをもらつたよ。

名前は「カブ丸」

少し小さいけどかっこいい。

虫かごにしめつた土をいれてみた。

モソモソ・ゴソゴソ

あれ、土の中にもぐつて出てこない。

おーい、おーい、呼んでも出てこない。

どうしたのかな、パパに聞いたら

カブトムシはやこうせいなんだって。

夜にそーっとのぞいてみたら

おつ。モソモソうごいてる。

やつと会えた、うれしいな。

ぼくといつしょだね。

夜しか会えないけど

カブ丸のこともつともつと
知りたいな。

ぼくの家のカメ

豊橋市立野依小学校
二年 すぎもと ありと

うちにはカメがいる

おとうさんが見つけた

にわにまよいこんで来たカメ

カメの水がみどり色によごれてきた

おかあさんがカメの水そうをあらう

「カメがにげちやうから見ててね。」

ぼくはカメをさんぱさせた

おかあさんはじやぶじやぶじやぶ

水そうをあらう

ぼくは家のカメを見てた

カメは草の方へ行つた

草むらでミミズを見つけた

よく見たらだつぴしていないだんご虫がついていた

ぼくはミミズをつまんだ

「おかあさん 見て見て」

「わつ めずらしいね」

と、びっくりしていた

「ところでカメはどこに行つたの?」
「しまつた」

「ぼくはあわててさがした

「カメがにげたらせわおわり」

「おかあさんが言つた

「ぜつたい見つけるぞ

「しんけんにさがすぞ

「いた」

「いたよ ここにいたよ」

木のところをぐるぐる回つていた

見つかつてよかつた

「カメもあんしんしたかな

だつて一人じやさみしいから

こんどにげたら

すぐわかるところにいるんだよ

犬

豊橋市立野依小学校
三年 たかせ りく

ぼくに いもうとがいるんだ

一ばん目のいもうとは おてとおすわりができるんだ おやつていつたら 速くはしって おやつがあるところに行くんだ
おやつついつたら首を右にふつて
かわいんだ

おしつこをしちやつたら
ごめんねつていつてきて
じぶんでゲージにはいるんだ

さすがぼくのいもうとだ

二ばん目のいもうとは、おやつていつたら
手を前にふつてかわいくわらつて
ちようだいちようだいやつてくるんだ

三ばん目のいもうとはおやつをあげたら
こつちをむいてごろんとして
わらつてくるんだ
食べたらありがとうといつてくる

まちがえてちがうところで

桜

豊橋市立福岡小学校
六年 志賀 優龍

ぼくの好きな桜

春になると

今年も大きくなつたねと
ぼくの成長を喜んでくれる

淡いピンクの桜の花は

風に揺られながら

「おはよう」

ぼくに話しかけてくれる

でも

淡いピンクの桜の花は

少しずつ 少しずつ

真ん中が濃いピンク色に変わり

やがて 別れの時を知つて いるかのように

ほんの少しの風で

花びらをはらはらと落としていく

桜が せつなく

静かに

花びらを散らす

涙となつた桜の花びらは
ぼくとの別れを惜しむかのように
辺りを花びらでうめつくし
白いじゅうたんとなる

花の命の短さを

尊さを そして、今この瞬間を大切に生きることを

ぼくに教えてくれる

「また来年会おう」

ぼくは桜と約束をする

夏の桜は緑の葉を茂らせ赤い実をつけ

秋の桜は緑の葉を赤や黄色に彩りおしゃれをし

冬の桜は冷たい風にじつと耐えて

ぼくとの約束の時を待つて いる

桜は そうして 変わることなく

春が来ると花を咲かせてくれる

ぼくの好きな桜

春に会えるのを楽しみにしている

選評

「帆・ランプ・鷗」賞

甲斐田 楓馬

あたりまえだと思ってることでも、考えてみればふしぎなことがたくさんありますね。

空の青さ、海は青いのに水はとうめい、形がかわる月、セミの声、自分についてくるかげ、夜ねてみる夢 空の無数の星、みんなふしぎをかくしています。ふしぎを見つける力はとてもだいじ。人間だけがもつ力かもしません。ふしぎを見つけて考えることで世界はどこまでも大きく、おもしろくなつていくことでしょう。

優秀賞

たいひ

青木 大知

お父さんのお仕事について行つたことから、ありふれていない題材がみつかりました。青木さんは「うんこ」だと言い、お父さんは「価値のあるたいひ」だと言う。そのちがいがまほうのようでおもしろい。

かわいいおとうと

かわい ひなた

さいしょの四ぎょうでおとうとのかわいさがよくわかります。おかあさんにおこられるときなど、きょうだいでたすけあつてているのですね。なかのいいきょうだいなのだな、と心があたたかくなりました。

ゾウのやさしい耳

中村 玲音

ゾウの体や行動をよくかんさつしていく、ゾウの心のなかもでそぞうしています。ゾウのやさしさを感じとり、つかまえられた悲しみやふるさとを思うさびしさを思いやつています。耳に注目したところがすてき。

いのち

岩澤 咲月

いのちはどこにあるのか、というむずかしい問題にとりくんでいます。自分なりに考えて いき、なくなつたひいおじいちゃんのいのちは岩澤さんの中にもあるのだ、とてもだいじな考えにたどりつきました。

ちょうちん

岩田 優花

おばんの行事、ぎしきのふんいきがよくあらわされています。ご先ぞ様をおむかえするときのおごそかな気持ち、お見送りするときのさびしい気持ちが「そつとちょうちんの灯を消すわたし」という言葉にこめられています。

佳 作

給食タイム

田中 柚名

給食のときの楽しい気持ちがとてもいきいきと書かれています。「心の中は、お祭りさわぎ！」という表現がぴつたりですね。

いろんなあなたのぞいたら

三田村 はぐみ

みのまわりにあるいろいろなあなたをつけ、ひとつひとつのぞいてみてなにが見えるかそぞうしています。とてもたのしい詩です。

ようかいとあそぼう

ため田 そうすけ

たくさんのようにあそぶことをそぞうして、それぞれにふさわしいあそびを考えだしています。これもいきいきとたのしい詩。

心ぞうの音 よしがい いな

きもちでかわる心ぞうの音を、ひとつひとつがう音としてかきわけています。じぶんの心ぞうの音のへんかによく気がついていますね。

豊川 林 奏剛

豊川の流れの壮大さが「のびる のびる」というくりかえしでよく表現されています。想像の中でウミガメ、キリン、ゾウなどが出てくるのも楽しい。

貝原 千誉 嘘

貝原さんのふだんの生活、気持ちがいきいきと伝わってきます。「いつかは必ず やり返す」ということばに実感がこもっています。

カブトムシ ひらまつ こう太

「カブ丸」という名前がりっぱでかわいいですね。カブ丸のようすやすきなたべものなどよくかんさつして書かれています。

ぼくの家のカメ すぎもと ありと

さんばさせていたカメがにげ、ぶじにみつけるまでのことがくわしく書かれていて目にうかぶようです。カメへのやさしいきもちがつたわってきます。

犬 たかせ りく

たかせさんにとつて三とうの犬は三にんのいもうとなのですね。いもうとたちのようすがとてもかわいくかかれています。

桜

志賀

優龍

桜の花が咲いてから散るまでや桜の木の四季の変化がよく見つめられています。人と桜は同じ命をもつていることが強く伝わってきます。

ゆきのしづく

中本

道代

まつのはにつもつて いるゆきのしづくが
いつてき いつてきと土のうえにおちる
ねむつて いた土はしづくをのんで目をさます

はるがくるまえ

ゆきのしづくはどんなほうせきよりもきれいに光る
とおいむかし
ほしのかけらのなかにとじこめられてやつてきたんだよ

【中学生の部】

選者

八木

幹夫

「帆・ランプ・鷗」賞

金魚

麻布中学校

二年 小笠原 快

優秀賞

一秒

豊橋市立青陵中学校

二年 宇津野 悠祐

ひこうき雲

豊橋市立中部中学校

一年 筒井 乃ノ花

花の音

豊橋市立青陵中学校

一年 青木 風子

不平等について

豊橋市立青陵中学校

二年 カミジルシオ 賢斗

魔法の言葉

豊橋市立北部中学校

二年 石川 美都

佳作

ロングジャンプ

豊橋市立中部中学校

一年 伊藤 瑞姫

海の青で

三年 中村 竜稀



縁

みんなを包む音の魔法

さまーばけーしょん

郡山市立大槻中学校

一年 桑名

豊橋市立二川中学校

三年 村田

豊橋市立青陵中学校

三年 福井

愛菜

迦子

優空



「帆・ランプ・鷗」賞

金魚

麻布中学校
二年 小笠原 快

朝、電車で、金魚を見ました
私の向かいの席に座っています
ニヤリと、笑っています

誰も気づいていません
地球も気づいていません
私たちとおんなじ力で おんなじように
回り続けています

金魚は電車を降りて
子供になつて
学生になつて
社会人になつて
保護者になつて
人間になつて
私たちの前にいつでもいる金魚
いつつも見えてる見えてない金魚

赤っぽい皮膚が弾けて
内側から人間が出てくれたら
これは着ぐるみですと言つてくれたら
でも、そんな嘘つぱちではなくて
膨れ上がるほどに真っ赤に染まる
金魚です

まばたきをすると
もう金魚は消えていて
代わりに
ガラスには私の顔が
くつきりと、映つてました

優秀賞

一秒

豊橋市立青陵中学校
二年 宇津野 悠祐

今、自分が呼吸をする
その一秒の間に

世界中のニワトリは三万五千個の
卵を産んでいる

○. 三人が飢えによつて
命を落としている

なにげなくすごしているこの1秒で
世界は大きく変わつている

そして誰かが生きたかつたこの一秒を

僕らは生きている

今、自分が笑う
その一秒の間に
体育館三十二棟分の
二酸化炭素が排出されている

自分は

あの人は

僕たちは

どんな一秒を生きているだろうか

一秒を大切にできているだろうか

そんな事を考えている今も

一秒が過ぎていく
そう今も・・・

今、自分が走る
その一秒の間に
世界の森林は
テニスコート二十面分消失している
あなたが今、この詩を読む
その一秒の間に

ひこうき雲

ひこうきが
たつた一つの
キャンバスに
描いた最初の
一直線

豊橋市立中部中学校
一年 筒井 乃ノ花

花の音

今日は特別心が弾む
友達と見る祭りの景色

人波に飲まれそうな夜に

手を引きながら歩いてゆく

涼しい夏の鈴の音が

祭りの始まりを知らせる

時間がどんどん進んでく

大通りが通りにくさを増す

その場の人皆が

広い空を見上げる

人々が待ちわびる声を上げ

たくさん人の話声が重なる時

その人々を その広大な空を

美しく包む満開の花

その場の人々が驚く

拍手？花の音？

どちらなのかわからないほど

万雷の音がその場で響く

ああ やっぱり今日は
特別心が躍る日だ

豊橋市立青陵中学校
一年 青木 風子

不平等について

豊橋市立青陵中学校

二年 カミジ ルシオ 賢斗

生まれた時から平等はない。

生まれた家、生まれた国が違ければ、もつと裕福に暮らせてたかもしれないし、貧乏になつていたかもしれない。

生まれた時からみんなが同じスタートラインに立つてないつてこと。つまり、不平等なんです。日本にも様々な不平等に関する問題がたくさんあるのです。例えば、人種差別や障害者差別、高齢者差別、経済格差、ジェンダー不平等などなど。それで苦しむ人はこの国にたくさんいます。

ただ、不平等は悪なのでしょうか。たしかに先程挙げた例は私も向き合うべき重要な問題だと思います。しかし、全ての不平等が悪だとは思いません。その理由は。

先程挙げた例にもあつた経済格差を例にするなら、経済的に不平等を感じ、その状況を打破するためにも知識やスキルを身につけ、キャリアの選択肢を増やす。このように不平等を努力や成長のチャンスと捉えるとともに不平等に価値を感じられるでしょう。

なぜ、と私の意見に疑念を抱く人はたくさんいると思います。

私が「不平等は必要不可欠である」と思うのは、不平等は一種の努力の源だと考えたからです。困難に直面したら、それを乗り越えるために力や技術を身につけるように。不平等という壁にぶつかつたら、それを壊すか乗り越えるかをするために努力を重ねて自らを強くする。

社会や人類の進歩に不平等は必要不可欠であると私は思うからです。

魔法の言葉

豊橋市立北部中学校
二年 石川 美都

おばあちゃん

私が生まれた日、パパと泣いた。

おばあちゃん

保育園からの帰り道、ママに内緒で一緒に
アイス食べた。

おばあちゃん

班長になつた日から毎日、一緒に登校して
くれた。

おばあちゃんはいつも私の味方で

おばあちゃんはいつだって優しくて

おばあちゃんの「大丈夫」は魔法の言葉。

だけど――

少しづつ、ちょっとづつ、

おばあちゃんが小さくなつていく

だんだんと、どんどんと

おばあちゃんからできる事が減つていく

ときどき、たびたび

おばあちゃんが悲しい顔をする

おばあちゃん

それ、さつき話したよ?

おばあちゃん

お鍋、焦げてるよ?

ねえ、おばあちゃん

いつか、私の事も忘れちゃうのかな……

おばあちゃん

これからは私がいつも魔法をかけてあげる

これからも私がいつだって笑顔にしてあげる

何度も言うよ

「大丈夫だよ、おばあちゃん」

魔法の言葉

これからは私があげる

佳作

ロングジャンプ

豊橋市立中部中学校
一年 伊藤 瑞姫

あの子みたいに速く走れたら

自らを鼓舞する。

助走のスピードがもつと出せるのに：
あの子みたいに体にバネがあつたら

目の前のたつた一点を見つめて

走り出す。

下を向くな！

前だけを見ろ！

あの子みたいに度胸があつたら
本番でもつと力が出せるのに：

最高のジャンプができた時
私は空をかけ上る。

もつと高く

もつと遠くへ

「たら」ばかり言つても
決して夢はかなわない。
私は夢を叶えたい。

「だから」努力を惜しまない

さあ、今日も

助走地点に立ち
何度も胸を叩いて

海の青で

豊橋市立南稜中学校
三年 中村 龍稀

海の青は 沈黙の色
語らなかつた言葉たちが
波の奥で 眠つてゐる
誰にも届かないいのりのよう
に
子どものころ 何も知らずに
空と海の境界を探してた
向こうへ行けると 本氣で思
い
裸足で砂をけつていた
濡れた風は 胸の奥を撫で
過ぎていつた日々を呼び覚ます
名前も顔も もう曖昧なのに
なぜか 涙の理由だけが はつきりして
いる
君が最後にくれた言葉も
書かれたままの手紙のことも
すべては波がさらつていつた
あの夜の海が 黙つて飲み込んだ
でも 消えたわけじゃない
海の青は 記憶の底で

いまも 柔らかく 光つてゐる
あの日の笑い声のかけらとともに
船もなく 地図もない旅路
ただ 潮の香りだけを頼りに
心は時折 海へ還る
もう誰もいない 白い浜辺へ
手を伸ばせば 触れられそうで
でもきっと 二度と届かない
それでも 私たちは
いつもどこかで 青に惹かれてる
誰かを想うときの静けさ
傷ついた胸の痛みの奥
希望が混ざり合う場所
それが 海の青なのだと ようやく知つた
今 この波音に包まれて
もう一度だけ 願つてみる
過ぎた日々も 失くしたものも
すべては この青に 還つていく

朽ちて 落ちた

たいせつにしていたのに

くるくる まわりながら

枯れてしまつた 百合の花

くるくる

丸を描くように

とける空気のなかに

温度があつた

私の大事なおばあちゃん

くるくると 一度光つて

消えた 命

くるくる

廻つて

私は

私の命を 最期まで繋ぐよ

私は手を握りしめた

きつく 優しく 撫でて 温めた

くるくる まわりながら

終わつたけれど

たいせつにしながら
大好きなあなたとの縁

一息

あなたが吸つてはいた 空気を
私は感じた

みんなを包む音の魔法

豊橋市立二川中学校
三年 村田 愛菜

ライブの夜、高鳴る鼓動
キラキラ輝くステージがまぶしい

応援したい、気付いてほしい

そんな一心で手を振り声をあげる

煌めくスポットライトが君を照らす

心の声を解き放てば

ライブに居る誰もが主役

つらいことも悲しいことも
全て心から消えていく

音と光が奏てる魔法

静寂のあとに再び聴こえる歓声

涙と夢と希望が交差する

響きわたる歌声は風のよう

みんなの想いが一つになる瞬間

会場が震えるこの瞬間

ライブは魂をつなぐ魔法

歌声は星空に溶けて

想いは風に乗つて届く

みんなの想いが一つになつたら

世界中が震えるほどの魔法に変わる
この思い出は時代を越えて輝く

どれだけ時がたとうと

美しい瞬間は色あせない

この記憶は宝物

汗ばんだ手

この奇跡を握りしめて

未来に大きく大きく羽ばたいていく

夜空に光る星のよう

みんなの笑顔がキラキラ輝く

力をもらつて

あの日諦めた夢を

もう一度追いかける

この思い出と共に前へ前へと進もう

音の魔法は続いている

私とあなたの心の中で

さあ、また会う日まで

夢と希望を胸に抱いて

みんなの想いが一つになつたら

さまーばけーしょん

豊橋市立青陵中学校
三年 福井 遷子

お日様からのあつい目線
いよいよ今日から夏休み
渥美線

に乗つて行きましょ 一級河川
時の流れはいかんせん
セミはそんなに長生きせん
もうすぐ近づく秋雨前線
ちなみに宿題おわってません

選評

「帆・ランプ・鷗」賞

金魚小笠原快

なんと不思議な金魚。日常生活のなかでちらつと垣間見た金魚。膨れ上がるほどに真っ赤に染まつた金魚。これは小笠原さんが見た電車のなかの幻視でしょうか。読み進めるうちにこの金魚はもしかすると私たちのこのこのなかに隠れている金魚なのかもしれないと思えてきます。「いつも見えてる見えてない金魚」と実に巧みな表現をしています。まばたきをすると金魚は消え、自分の顔がくつきりとガラスに映つていて。金魚がニヤリと笑つていて。金魚がニヤリと笑つていて。じょうに回つていて。金魚。何度も読み返してもこの詩の不思議は消えません。丸山薰先生の詩のようにどこか秘密めいていところが魅力です。

優秀賞

一秒 宇津野 悠祐

一秒の持つ緊迫感があり、世界の出来事に対しても敏感なアンテナを持つています。「誰かが生きたか死んだか」を瞬時に察する力は、この言葉で表現できます。この言葉はボンヤリ生きている私たちを叱咤激励します。

わくうき雲

筒井 乃ノ花

短い作品ですが、題名と五行の言葉がきちつと鮮やかな詩を構成しました。詩は理屈や説明ではありません。言いたいことをスッキリと言い切ったところにこの詩の良さがあります。青い空と白い直線が広がりました。

花の音

青木 風子

題名が面白い。花の音とはなんだろう。「満開の花と夜空」で花火のことだと気付きます。大観衆に見上げられる花火。夏の花火の醍醐味は観衆の喊声や音に象徴されます。心躍る真夏の夜の大輪の花。

不平等について カミジルシオ 賢斗

人間社会に平等は最初からないと断言していますが、カミジルシオさんは不平等が悪ではなく、一種の努力の源だと肯定的にとらえている点が素晴らしい。人はこの不平等をバネにして努力するからです。

魔法の言葉 石川 美都

いつも寄り添い魔法の言葉「大丈夫、大丈夫」と言つてくれたおばあちゃん。そのおばあちゃんは出来ることが減つてきた。物忘れもすすみ、心配なことも増えてきたが、今度は石川さんが魔法の言葉をかける番です。

佳作

ロングジャンプ 伊藤 瑞姫

他人と比較する前に自分を鼓舞する。下を向くな！前だけを見ろ！目の前の一点をみつめてジャンプ！ロングジャンプの成功を祈る。

海の青で 中村 竜稀

海の青が様々な思いを蘇らせる。過ぎた日々、あの人のおぼろな顔、涙した理由。海の青は静けさや希望が混ざり合う場所。

縁

桑名 優空

祖母と私をつなぐ縁。吸つてはいた空気を受け止めた。「くるくる廻つて私は私の命を 最期まで繋ぐよ」祈りのような宣言です。

みんなを包む音の魔法 村田 愛菜

ライブ会場の音の饗宴に村田さんは酔いしれたようですね。会場全体の一体感が伝わつてくる作品でした。

さまーばけーしょん 福井遼子

脚韻を踏んでとても愉快。「セミはそんなに長生きせん」最後の「宿題おわってません」には、先生なんともいえません。

選者作品

春の購買力

八木

幹夫

葱を持つて いる男が 通る

青々とした 威勢のいい 男だ

葱を持った 少年が 走つて いる
まつすぐ に育つといいな

葱を持つ 女が 笑う

首筋は白く 水がこぼれたらはじけそ

出会う人は 葱をかかえて

同じ方向から やつてくる

葱は 安いんだろ うか

向うの山の斜面に 異常発生したの だろ うか

美味しそうな 色艶

美味しそうな 句い

すれ違う別の男にも女にも

触発する

刺激する

「葱が買いたいわ」

「葱は何にでも使えるからね」

公園のいたるところから

ほのかに（この形容は臭い）

葱が匂う

流され易いのだ

誰もが持っていると

詩集『夜が来るので』より
(二〇〇八年 砂子屋書房)

刊)

【高校生の部】

選
者

細
見

和
之

「帆・ランプ・鷗」賞

私の三日月

緑誠蘭高等学校

一年 三日月うさぎ

優秀賞

ペルソナ

大分県立大分上野丘高等学校

二年

岩下

真理華

蕾

大阪府立和泉高等学校

一年

永岡

千和

名古屋市立中央高等学校

三年

翼

光と影の狭間

北海道札幌南高等学校

三年

宮本

万起男

思い描いて

鹿島朝日高等学校

三年

井上

めぐみ

佳作

こころ そして おと

愛知県立時習館高等学校

一年

彦坂

秋嘉

境界線

桜丘高等学校

三年

高橋

梨姫

ビキニを着たせみ

桜丘高等学校

三年

藤原

衣織

夏の星

桜丘高等学校

三年

神田

紗菜

小川

桜丘高等学校

三年

丸地

海斗

大人になる私

桜丘高等学校

三年

秋國

雄太

私は十八歳

藤ノ花女子高等学校

三年

ブニりん

自然

徳島県立脇町高等学校

二年

坂本

梓

本能従者

岩手県立一関第一高等学校

二年

菊池

凜

お墓

愛知県立時習館高等学校

三年

豊島

穂南



「帆・ランプ・鷗」賞

私の三日月

緑誠蘭高等学校

一年 三日月うさぎ

腹をおつびろげ

横たわる兎を見たことがあるか？

横たわっている

腹が上下している。

生きている。

寝姿である。

私達のことを

一心に信じてくれている

証明の一節である。

その景色を見、

あ、三日月。

兎の背の骨は丸い

床にひつついていると

さも当たり前のように

体がくるんと弧を描く

その様子は

ふと彼女に目をやると

先刻言ったように

普段は見せぬ腹の内を

みつともないぐらいに

おおつびろげ

頭と四肢を投げ出し

さながら

夜空を我が物にしている
妖艶な三日月

原稿を書き上げ、
失くさないよう留め、

自室を後にする。○

階下に立つて

目に入るは、

私の、

私だけの三日月。

心のほどける音がした。

優秀賞

ペルソナ

大分県立大分上野丘高等学校

二年 岩下 真理華

あなたにだけ向ける 精一杯の微笑
母にだけ放つ 嘁れた怒声

父とだけ交わす 理知的な会話

君にだけ合わせる 中身のない共感
先生にだけ使う 形骸的な敬語

あの人にはあの顔、この人にはこの顔
いくつもの仮面を使い分けて
私達は生きている

きみに許してあげるよ
ほんとうのきみになること
でもきつときみは言うんだ
どれがほんとうのわたしだろう？

きつとその顔もどの顔もきみの大切な一部

愛想笑いを浮かべるのに疲れたきみは言つた
いい子をやめたらきっと
感じが悪いとか
空気が読めないとか言われる
それが怖くて演じ続けた末
顔に染みついたこの仮面

きみはきみしかいなくて
失われることのないものだけれど
同時に掴みどころがなくて
きみがあの人の前で用意する言葉も
画面上のきみが気取る姿も
紙にぶちまけるきみの思いも
切り取られた一部が

完全になる日は来ない

外したいものを外せば 憎むものを失えば
きっとそこには何もない空っぽだけが広がり
だからきみは他者を必要とする

自分ひとりでは 何者にもなれないのだから
不完全を通してしか

完全を知ることができない私達だから

薔

私の家にはたくさんの薔がある

20ページに葉が挿まつた小説

針が刺さつたままのコースター

ほんのかすかに汚れたスケートボード

チューニングされていない

アコースティックギター

そして棚の奥に眠る人部届

ひとつずつでいいから
花を開かせたい

大阪府立和泉高等学校
一年 永岡 千和

終わるとしたら――

名古屋市立中央高等学校
三年 翼

終わるとしたら――

睡眠薬を浴びるように飲む人
神に祈り続ける人

生きることを絶対に諦めない人
自害を選択する人

当たり前のように思っていた

日常の崩壊――それが突然

前触れもなく訪れた

生きていらるるのは、あと二十四時間

悲鳴の嵐が街を包む

「子供の泣き声」を搔き消す

「大人の泣き声」

最後の日はきっと、絶望が世界を襲う

もし明日、世界が終わるとしたら――

お腹いっぱいご飯を食べる人

いつものように会社に出勤する人

スマホでライブ配信をする人

愛する人を思う人

もし明日、世界が終わるとして
私はどんな一日を過ごすだろう
もしも世界の話なら――私は――
最後のいつも通りを、大切に過ごしたい

もし明日、世界が終わるとしたら――

どんな一日を過ごしますか？

光と影の狭間

北海道札幌南高等学校
三年 宮本 万起男

朝、

窓辺の光がまだ頗りなく差し込み、冷たい床に
素足を置く。
小さな呼吸が部屋の空気をゆっくりと動かし、
やがて湯気を立てる茶碗が心臓の鼓動に寄り添
う。

昼、

街はせわしなく言葉を交わし、
信号の青と赤が
人々の歩幅をそろえていく。
見上げれば
大きな雲が悠々と流れ、
その下で小さな自分が
同じ速度で時間に押されている。

夕暮れ、

西の空に色が重なり、
誰のものでもない一瞬が
大地と空のあいだに広がる。
帰路につく足取りは
疲労と安堵を抱きながら、
どこか小さな希望を探している。

夜、

机に積もる影の濃さに気づき、
午後、

細い糸のように耳に届く。

灯りを落とした部屋で

自分の心臓の音がやけに大きい。

けれど、

その鼓動は明日への約束でもある。

そして眠り、

無数の夢の欠片が

また次の朝を運んでくる。

思い描いて

鹿島朝日高等学校
三年 井上 めぐみ

暖かな日差しの夏を思い描いて
寒さに凍える冬を乗り越える

死の向こうの景色を
死の先にいるあの人を

友達と遊べる放課後を思い描いて
英単語のテストを乗り越える

そしてある日気がついた
そんなの誰にもわからないことに

そうやつてわたしは生きてきた

でも思い描くことで備えることはできた

身近な人の死にふれるまでは

優しい笑顔の母の死を

時に厳しい父の死を

死の先にはナニがある?
思い描こうとしてもわからない

支えてくれる親戚たちの死を
今を生き抜く仲間たちの死を

恐怖だった

わたしは思い描いた

でもきっと思い描くことはきっと無駄ではない

だから、安心してほしい
わたしはみんなの死に備えています

そう信じて

わたしはひたすらに思い描いた

佳作

こころ そして おと

愛知県立時習館高等学校
一年 彦坂 秋嘉

うれしい おと

清くすんだ空に一期一会の雲をみたとき
予習したことが授業で説明されたとき
走つたら一本前の電車に乗り込めたとき
人を友達と呼べるようになつたとき
はなやかでちよつとへいほんな おと

かなしい おと

人に短所を指摘されたとき
友達がなやみ苦しんでいるのに
何もできなかつたとき
突然大切なものを失つたとき
自分の思いが人に伝わらないとき
ふれたくないちよつととおざけたい おと

いかりの おと

人をおとしめる気を感じ取つたとき
意志がむげにされたとき
努力が非難でうめつくされたとき
人間の世の邪悪を感じたとき
にえたげるようになついちよつとつめたい
おと

いつか だれかが教えてくれた
「音は心」

人生を歩いていく中で何を経験し何を
感じるのか
この心もようでどんな音が奏でられるだろう

今日も心のままに 息を吹き込む

境界線

桜丘高等学校
三年 高橋

梨姫

夢を見た

女の子として生まれる
とつてもかわいいお洋服を着て
あのアイドルみたいに歌つて踊るの

夢を見た

男の子として生まれる
ゲームをしてマンガを読んで
あのヒーローみたいにみんなを救うんだ

私は

どつちでもあり
どつちでもない

僕は

地球に人間として生まれて生きている

同じなのに何かが違う

何かがちょっとだけズれている

この世界が
境界線のない虹色であふれたら
もつと幸せになれるのに

ビキニを着たせみ

桜丘高等学校
三年 藤原

衣織

ビキニを着たせみ

せみは一週間しか生きられない

人間のように

アイスを食べる事

かき氷を食べる事

そんな事はできない

大好きなビキニを着ることもできない

哀しい生き物です

スイカのように壊れやすい

そして一週間の最終日

せみには絶対にできない

ビキニを着ることにした

これは一夏の夢

夏の星

空を見上げる 八月の夜

三十五光年先のベガがやつと今光を届ける

アルタイル デネブ そしてベガ

夜空に輝くその一瞬に
過去と今が重なる
夏の星は語らない

夏の大三角形は数十光年という距離を越え

今ここに仮初の並びを描く

けれどすべてを知っている

でも本当はずれている

時間のずれ 位置のずれ

星たちはすでに別の場所へ

それでも人間はそこに意味を探す

桜丘高等学校

三年 神田

紗菜

小川

小さな水が
石にあたり
ころころ音を立てる

ただ流れて
ただ消えていく

それでも
空を映している

桜丘高等学校
三年 丸地

海斗

大人になる私

桜丘高等学校

三年 秋國

雄太

私は恐しい

大人になるのが恐しい。

失われつつある子供の特徴
失われていく純粹さ

私は恐しい

大人になるのが恐しい

無責任の気楽さと
責任を負う苦しさが。

私は恐しい

大人になるのが恐しい

軽蔑していた存在に
私が成るのが恐しい。

私は少し誇しい

少し穢れた手を見て

嫌悪感を抱くこと。

私は十八歳

藤ノ花女子高等学校
三年 プニりん

私は十八歳になつてしまつた

私は十八歳になりたくなかつた
怖かつたから

社会のことなんか何も知らないのに
ニュースも新聞も読まないのに

選挙だつてよくわからな
い

誰に投票すればいいのか
どの政党を応援すればいいのか

こんなに知らないことだらけなのに
大人になつてしまつた

私は世の中を全く知らない大人
私は自分に絶望した

先生に相談した

おめでとうと言われた
十八歳だからいろいろできる
選挙に行ける

一人で契約できる

その分責任はあるけど

できることが増える

そう言われた
私は少し気持ちが軽くなつた

私は十八歳
昔よりできることが増えた

その分責任があるから

選挙に行く時は
一人で契約する時は

しつかり考えてから行動しよう
そう思つた

自然

徳島県立脇町高等学校

二年 坂本 梓

森の声、川の影	鹿が鳴く 霧の奥
ツキノワグマが 静かに歩む	猪が土を掘り 猿が空を笑う
キヨンの瞳に 遠い島の記憶	ヒグマの足跡 雪に沈み
アライグマが 夜をさまよう	アリゲーターが 水底の夢
アメリカザリガニ 赤く燃える	フクロギツネが 風を裂き
カニクイザル アカゲザル	ヌートリアが 枝を揺らす
タイワンザルが 川辺に眠る	ジャワマングース 影の速さ
タイワンリス トウブハイイロリス	ガビチヨウが 歌う異国の調べ
ジャワマングース 影の速さ	カオグロ カオジロ ソウシチヨウ
ガビチヨウが 歌う異国の調べ	カミツキガメ 静かな怒り

グリーンアノール ブラウンアノール	ミナミオオガシラ 空を裂き
タイワーンスジオ 森を這う	タイワーンハブが 毒を秘め
オオヒキガエルが 夜を告げる	チャネルキヤツツフィッシュ 深き流れ
ブルーギル コクチバス オオクチバス	アルゼンチンアリ 赤カミアリ
ヒアリが 地を這う炎	ナガエツルノゲイトウ 水を覆い
ミズヒマワリ 光を奪う	誰かの都合が 静かな命を揺るがせた
日本の未来はどうなるのだろう	

本能従者

岩手県立一関第一高等学校
二年 菊池 凜

校長先生が言つた

居眠りをするということは本能に抗えない
犬猫と同じなのだと

それなら今隣でうつらうつらしてゐる少年は
今まさに犬か猫になつてゐる途中なのか

そう思うと途端に可笑しくなつてしまつて
意味不明な数列の授業も楽しく思えてきた

とある男子高生が言つた

太つた人というのは自己管理が出来ない

だらしない人なのだと

それなら贅肉の塊を抱えた私は

彼の言うだらしない人の一人で

一応どうにかしようとは思つてゐるので

食後のアイスを食べた後ちょっと歩いてくる

中学のときに同級生が言つた

初めての彼氏は小学五年生で

中学生にして経験豊富なのだと

彼氏のかの字もない私には到底理解出来ない
それも必要なことだつてことは分かるけど

今が楽しいからまだ知らなくていい

私が言つた

明日後悔したとしても

私は今日夜中にご褒美アイスを食べるのだと

たとえ誰が私を笑つても

毎日頑張つてゐる私へのご褒美に

私は私の好きなことをする

私は本能従者なのだから

お墓

愛知県立時習館高等学校

三年 豊島 穂南

お墓が苦手だ。
寂しさに、哀しさが取り憑いてくるように感じる。

それでも放課後スーパーで花を買い、
定期的に顔を出しに行く。

ご先祖様には申し訳ないけれど、
墓石の前で祈る相手はただ一人、
あつちゃんだ。

亡くなる前日には
華やかなおせちを作ってくれた。
私タイトルの四コマ漫画を描いてくれた。

7億円の使い道を必死に考え、
外れの宝くじにめいっぱい悔しがった。

話して、聴いて、ゲラゲラ笑って、

一瞬たりとも匂わせず、

急に
パタリと逝つてしまつた。

だから私は
ひたすらに、
無音に耳を寄せていた。

あれからもう三年は経つた。

墓石の前では
気力を失うほど語つてきたけれど

今日はなんだか
すべてを吐き出したくなかった。

少し出して、あとは心に還してみた。
それがちょっぴり、よかつたんだ。

そして気づいた。

私は今まで、
あつちゃんの声を聴こうとしていなかつた。
私ばかりが語つていた。

選評

「帆・ランプ・鷗」賞

私の三日月

三日月うさぎ

学校で生まれたばかりの兎を譲りうけて、自宅で飼いはじめて六年。その兎の姿がじつに生きいきとまた丁寧に描かれています。兎に対する作者の深い愛情とともに、作者の確かな観察力がうかがえます。「学舎」とか「愛兎」とか古風な言葉もさることながら、まるでひと昔まえの文豪のような文体が使われていて、それがかえって作品に締まりを与えています。私も自宅で兎を飼っていたことがあります。兎は個体差が激しいようで、この「三日月」のようには私たちを信頼してくれていらない感じでした。その兎が、それでもいちばん信頼していたのは、当時まだ小学生の長女だったのを思い出しました。

優秀賞

ペルソナ

岩下 真理華

相手に合わせて自分の顔つきを替えなければならない人間関係は難しい。「ペルソナ」は人格のことで、大切な内面を表わしているはずなのに、その語源は「仮面」。仮面しかないなら「私」は不在なのか。そこを問い合わせた力作です。

蓄

永岡 千和

高校一年生の作者のなかには、さまざまな可能性が秘められています。読みかけの本、すこしだけ汚れたスケートボード、調律されていないギター……。「棚の奥に眠る入部届」ではつとさせられます。行間の生きている作品です。

終わるとしたら――

翼

「もし明日、世界が終わるとしたら」という問いは、私たちがいつも胸の奥で発しているものに違ひありません。実際、

巨大隕石が地球に衝突すれば終わりは瞬く間にやつて来ます。問い合わせで結んだ余韻がいいです。

光と影の狭間 宮本 万起男

早朝から翌朝にいたるまで、一日の時間の流れが理知的に捉えられています。それぞれの時刻のなかに微妙な光と影が孕まれていることを確かめ、そこに言葉が巧みに沿わされています。作者の力量がたっぷり發揮された作品です。

思い描いて 井上 めぐみ

「身近な人の死」にふれて作者がはじめて「死」というものを強く意識した体験、それが素直に描かれて います。「死の先にはナニがある?」という答えない問いを繰り返しながら、私たちは生きてゆくほかありません。

佳作

こころ そして おと 彦坂 秋嘉

「うれしい おと」「かなしい おと」「いかりの おと」……。音がどう聞こえるかで、自分の心の状態が分かるのですね。発想の生きた作品です。

境界線 高橋 梨姫

女性、男性だけではない性の多様性が問い合わせなおされている現代。「境界線のない虹色」というのは、その多様性を象徴した優れたイメージです。

ビキニを着たせみ 藤原 衣織

せみの命の短さを主題にした作品が何篇かありましたが、「ビキニ」と結びつけた本作は秀逸。「ビキニを着たせみ」は作者そのものの姿です。

夏の星

神田 紗菜

星の光は途方もない時間を超えて届いていて、私たちが読み取る星座には、いつもズレがある。それでも星空を見上げる私たち……。

小川

丸地 海斗

少ない言葉でどれだけのことを描けるか。それが詩の醍醐味のひとつであることを示してくれている作品です。

大人になる私

秋國 雄太

大人になることに感じる不安と、そう感じていることにすこし誇らしさを感じる「私」。きっとそれがもう大人への第一歩なのでしょう。

私は十八歳

ブニリん

「十八歳になってしまった」——。秋國さんの作品と同様に、その不安と喜びがしっかりと描かれています。

自然

坂本 梓

よくもこれだけ生物の名前を登場させたものです。まるで博物誌のような記述に、いささか眩暈を感じました。

本能徒者

菊地 凜

いろんなひとの言葉を登場させて、最後に「私」が語るという巧みな構成。「本能徒者」という言葉で居直る姿が清々しい。

お墓

豊島 穂南

三年前に急逝した「あっちゃん」の墓前で、自分が語るのではなく「あっちゃん」の声に耳を傾ける。作品に静謐な時間が流れています。

選者作品

初詣の帰りに

細見 和之

顔をうつぶせているひとの前で

しきりにスマートフォンをのぞいているひとがいる

笑っているひとの横で

アイパッドに指先ですばやく入力しているひとがいる

笑っているひとは

どこか遠くにいる携帯電話の相手に笑いかけていたのだ

私の中一の娘もさつきからラインに夢中である

なにをお願いしたのかという、私の問い合わせをスルーして

すると隣のテーブルのひとが真顔で明瞭にひとりごとを唱えはじめる
ドキッとしたが、ピンマイク式の電話口に話しかけているらしい

ふと立寄った喫茶店、ここにもワイ・ファイが飛び交っている
まるで大教室でのおれの講義みたいだな……

カラソカラソとドアの鐘を鳴らして

古典的な雨合羽を羽織つた郵便配達夫が現われる

——地獄の三丁目つてこのあたりですか？

詩集『ほとぼりが冷めるまで』より
(一〇二〇年 濱標刊)



丸山薰の略歴と業績

明治三十二年	六月八日大分県生まれ。	昭和三十二年	第十回中日文化賞を受賞。
明治三十八年	内務省官史の父の転勤で京城（ソウル）へ移住。	昭和四十二年	旧四季同人を中心に詩誌『四季』を復刊。
明治四十四年	父の死により母方の祖父の地、愛知県豊橋市に移る。	昭和四十九年	愛知県豊橋市の自宅で永眠。
大正七年	東京高等商船学校（現・東京海洋大学）に入学。病気のため退学。	年	丸山薰の作品には、第一詩集『帆・ランプ・鷗』をはじめ『幼年』『物象詩集』『青春不在』『連れ去られた海』『蟻のいる顔』など十六冊の詩集と、短編小説集『蝙蝠館』、エッセイ集『蝉川襍記』、その他多くの詩選集『丸山薰詩集』がある。
大正十年	第三高等学校（現・京都大学）に入学。	没後、昭和五十一年に『丸山薰全集』全五巻が刊行され、さらに平成二十一年は、丸山薰の生誕百十年、没後三十年に当たるため、全六巻からなる『新編 丸山薰全集』が刊行された。	
大正十五年	東京帝國大学（現・東京大学）に入学。		
・昭和元年	第九次『新思潮』同人となる。		
昭和三年	高井三四子と結婚し、詩活動に専念。		
昭和九年	堀辰雄、三好達治と詩誌『四季』を創刊。		
昭和十年	第一回文芸汎論詩集賞を受賞。		
昭和二十年	山形県西川町岩根沢に疎開。岩根沢国民学校代用教員を務める。		
昭和二十三年	疎開先の山形県西川町岩根沢から愛知県豊橋市に戻る。		
昭和二十四年	愛知大学講師、後に教授となる。		
昭和二十六年	中部日本詩人連盟結成、委員長となる。後に中日詩人会に改組され、引き続き会長。		
念館がある。			



丸山薫「帆・ランプ・鷗」賞は、丸山薫賞の運営委員として丸山薫の業績の顕彰と普及に取り組み、本市の文化振興に尽力された「故 神野信郎氏」によるご寄附を財源に、実施しています。

令和七年度 第五回

丸山薫「帆・ランプ・鷗」賞 作品集

令和八（2020）年二月七日 発行

発 行 豊橋市文化・スポーツ部文化課

〒440-1850 豊橋市今橋町一番地

電 話 ○533-151-12874

F A X ○533-156-1081

E-mail bunka@city.toyohashi.lg.jp

印 刷 所 (有)伊藤印刷

